

3. プイ・ロボットの将来計画

気象庁では1972年度から毎年1基ずつ実用プイ・ロボットを製作し、本州南方、東支那海、日本海、本州東方の順で配置する予定である。

1975年以降は人工衛星中継によるプイ・ロボットが毎年数箇あて製作され、日本周辺の気象資料の空白海域に順次配置される計画である。このようになれば船舶の航行安全は勿論、気象解析にも大いに役立ち、予報適中率の上昇に資するものと考えられる。

一方、海上保安庁、水産庁でもそれぞれ気象庁のものとは異なった目的のプイ・ロボットが開発され近い将来日本近海に配備される計画があることを洩れ聞いている。

質 疑 応 答

石橋朋継(津居山漁協)：プイ・ロボットで観測した水温および流向等を知ることは、イカ釣り漁業者が漁場の選定をするうえで有益と思われるが資料を海岸無線局を通じてでも随時知らせてもらえないか。

赤松英雄(舞鶴海洋気)：まず、無線局と気象台との間で、そのための新たなとりきめをしなければならぬだろう。資料を利用してもらうためには喜んで提供する。現在はまだ実験用プイ・ロボットなので、何時でも要望にそえるとは限らない。

長井武夫(島根那賀漁連)：プイ・ロボットは対馬海域にはいつごろ設置されるか。

赤松：気象庁がプイ・ロボットを設置する目的は洋上の無人気象観測所の役目をもたせ、災害防止に役立たせることにあるので、最初はず日本海の中央海域に設置し、のち次第に数を増してゆく計画である。しかし、今のところ対馬海域に設置する計画はない。むしろ沿岸海域の漁業用プイ・ロボットが水産庁の所管になると思う。

5. 境港における沖合スルメイカ漁況と漁場変動について

川 口 哲 夫 (鳥取県水産試験場)

鳥取県境港における日本海沖合スルメイカの漁況と漁場変動を1967年～1971年の結果について検討した。

1. 境港におけるスルメイカの漁獲量

1967年にわずか185トンであったが、1968年には939トン、1969年に8,383ト

ン、1970年には29,300トンと急激に増加し、1971年には32,763トンとなっている。

2. 各年の1航海平均漁獲量

1967年3.1トン、1968年5.3トン、1969年と1970年はともに6トンであったが、1971年には4.8トンと減少した。

3. スルメイカ漁獲量の季節的变化

1～3月では漁獲量は年間の最低となるが、4～6月には春イカ漁がはじまり漁獲はやや増加する。7月～11月には秋イカ群が大量に漁獲されるが、中でも8～9月には最も漁獲が多く、11～12月にはしだいに減少する。しかし、1969年の1月には冬イカ群の来遊がみられ、また、1970年の4～5月には春イカの好漁がみられた。

4. 境港におけるスルメイカ漁船の出漁状況

着業船数が1967年にはわずか20隻であったのが、1968年に31隻、1969年には143隻、1970年に350隻、1971年には450隻となった。一方、延入港隻数は1967年には60隻、1968年に177隻、1969年1,400隻と急増し1970年には5,100隻、1971年では6,800隻であった。

5. 境港を基地とするスルメイカ漁船の出漁する漁場の変動

一般的に1～3月では対馬～隠岐島沿岸にかけての海域であり、4～6月には隠岐島～能登半島沖合にかけて漁場が形成され、7～10月では大和堆よりウツリョウ島北方海域の日本海極前線海域が漁場となる。11～12月には漁場はしだいに南下し朝鮮東岸～対馬沖合にかけて形成される。また、各年の漁場形成海域には変動が認められるが、この変動要因としては、日本海沖合の海況特に対馬暖流の流路と、極前線の変動に関係が深いと考えられる。

質 疑 応 答

田代征秋（函館水試）：年による漁場変動を等温線の北偏・南偏で説明されたが、その他生物的特性（♀の交接率や♂の成熟率など）との対応はどうか。

川口哲夫（鳥取水試）：これについては日水研で日本海全般としてみているのでそちらを参考にしたい。